

秋ふかく、紅葉をあとに鹿島だち、横浜港を船出して、乗り切る船や浅間丸、赤い二びきの煙突に、なびく煙が名残りなら、残る煙りが煙の種、という殿御のあり無しや、巴うの子の一行は、しばし故国へ別れぞと、遙かうしるを見返れば、峰は白雪なかは雲、裾はかすみの富士の山、富士の高嶺をあとに見て、行く手はるけき太平洋、見渡すかぎりびようぽうと、大海原の三千里、海に明けては海に暮れ、幾夜ねがめの浪まくら、結ぶはハワイの夢ばかり。

(一)

浪路八日もあけ晴れて、嬉しや着いたホノルル府、ホツと一いき胸なでしこも、お上りさんの悲しさは、移民局へと送られて、年はいくつじや名はなんと、こわい調べも無事にすみ、籠をばなれし鶯の、舞いたつ思いの嬉しさよ、初めて見たるホノルルの、モダンきわめしビルデング、行き交う自動車織ることく、グロな美人も目につきて、異国のエロの匂いあり、(追分)行こかアメリカ、帰ろか日本、此処が思案のハワイ国。

(二)

ときわぎ茂り花は咲き、げに誇らき常夏の、恵みゆたけきハワイかな、コーラウ山脈はれ渡り、エワの岬はかすめども、ダイヤモンドに打ち寄する、太平洋の汐の花、ワイキキ浜の浪乗りか、ガラスボートで鯨みる、ハレイワ海岸舟遊び、絶景ヌアヌバリこそ、布哇の大王カメハメハ、古戦場とぞ知られたり、吹くや晴嵐へエイヤ時雨、月夜に虹姫あそぶてう、マノアの谷の深みどり、呼べば答へんマウイ島、イアオの谷や針の峰、常は焼かない妾さえ、肉の石焼き味のよさ、日輪住むてう伝説の、お山もきようはハレアカラ、六根精浄のぼりたや。世界一なる大火山、ほのうの海のキラウエア、布哇島の誇りなり、旧都雅味あるヒロの町、弦月湾の浪静か、造ったようなヤシ島の、月夜的美感に雨けふる、山の王座はマウナケア、嶺に頂く白雪は、げに常夏の異観ぞや。

(三)

風光明眉随一と、世に謳はるゝカワイ島、可愛いカワイのその名さえ、なつかし同胞にワイメアか、オロケレ谷の自然美に、見とれて落ちたらアナホラじや、コロア元祿ハナレイの、稲田に故国を思ふなり、あまた同胞発展の、この島々へ渡るにも、船の便あり飛行便、一夜の船路かひととびか、機械文明の有難さ、各国人種のある中で、我が同胞の発展は、永住土着の基礎かたく、子は子を生んで孫もあり、小学校から中女学、教育機関も完全し、布哇報知や日布時事、ヒロ毎日や朝日に火山、マウイ新聞レコードマウイ、カワイ新報や洋園時報、言論指導の機関あり、商業実業政治界、第二世も進出し、三十五仙のホレホレに、泣いた苦勞は楽の種、かくも成功の皆さまを、はるばるしたい渡り鳥、情の枝にすがりつゝ、幾重巴のお引立て、伏してお願ひ奉る。

(四)

ハワイ渡航まくら

浪曲 巴うの子
作詞 本田 政亥

こぼれ話

1930(昭和5)年 本田政亥(緑川)が浪曲師 巴うの子をイメージして、日本語新聞布哇報知の記者時代(後に編集長)に作詞をした。翌年秋ホノルル市ホテル街の椎木商会在東京日東蓄音器にSPレコードのプレス依頼、2枚1組2ドルで2000組を販売した。

- 巴うの子が巡業に来布した時は新鮮味が薄れ「客の入りが悪かった」と彼女にぼやかれた。
- ホノルルには長くいるが、カウアイ島の地名が間違っていた。
- 印刷した曲詞を紛失した。25年後(戦後)ミサヲ・ヨリタがスコッチ・テープで貼り、保存していることを知り復元できた。

と本田は述懐する。

- 浪曲の起源や発祥の地は諸説あり、決め手に欠けるが、明治の後期に隆盛を極め、落語・講談とともに日本三大話芸に数えられる。
- 演台にかけてある布は「テーブルかけ」と呼び、業界用語としてほかにはないのか疑問に思うが、テーブルは明治以降の外來語で、当時はモダンな印象であったことから、テーブル・クロス→テーブルかけとして名付けられ現在も使用されている。

日本語新聞 布哇報知・・・1912(大正元)年創刊 現在尚発刊中
来布・・・ハワイに来ること

依田ミサヲの「ハワイ渡航まくら」
当館が復元 CD 化

日本語放送局KGUがミサヲのために、SPレコードをプレスして



発刊
語り継ぐ移民の歴史
A4判 247頁
定価3,800円(税抜)
Amazonで注文
できます
当館でも承ります

私と
母の履歴書

祖父母が渡航した1899(明治32)年は、携帯金として50ドルを所持していることが条件であった。

プランテーションでの労働には、植付け・水やり・草取り・収穫などがあつたが、収穫した黍を列車や運搬車に運ぶハッピーコウは重労働のため他の職種より賃金がよかった。

祖父はそのハッピーコウとして働き、祖母は豆腐屋を開業。栄養価が高く手軽で安価な副食品として毎日需要があり、安定した固定収入になった。カウアイ島の中で工場があるプランテーションには、もれなく1軒はあつた。

ハワイ生まれの母、長女ミサヲは独立心が旺盛で妹2人と理髪店を開業。余技は、民謡・浪曲・歌が得意なこと。陽気で世話好きとあってひっぱりだこ。日本語放送局・町村人会の催し・コンクールなどあちこちに顔を出し賞品をものにした。有名人であつた。

これは、ミサヲとその一人息子、操一の物語である。

やすむらじんかい
安村人会 設立 1912(大正元)年 初代会長 津川条吉
会員 35人 1964(昭和39)年現在



1899(明治32)年10月、祖父と祖母は長男一男を連れてハワイに渡航。祖父はワイメアプランテーションでハッピーコウとして働き、祖母は豆腐屋を開業しました。6年後、そこで生まれたのが私の母です。
ワイメアでは、妹・弟・妹の3人が生まれ7人家族となりました。成長した子供の進学を考えて、13年間住みなれたワイメア生活に別れを告げオアフ島のプウルアプランテーションに移り住みました。ホノルル港と真珠湾の中間地点にある小さなプランテーションです。ここで末の弟實が出来ました。

1927(昭和2)年頃、母は妹2人でホノルルの南ベレタニア街で理髪店を開業しました。3姉妹の店ということでずい分評判になったようで、日本人理髪同盟会の役員は男38人、女20人、という顔ぶれを見るとホノルルには女性が経営する理髪店が多くありました。

1930(昭和5)年頃、祖父母は三姉妹の成功を見届け、弟の昇・實を連れて帰国、安村の生地に自宅を新築しました。

1933(昭和8)年2月ホノルル理髪同盟会(組合)の区長に選ばれました。

1933(昭和8)年4月、祖母から母の縁談話をまとめたと父母から帰国を促され、翌年9月に私が誕生しました。ところが父との折り合いが悪く離婚。

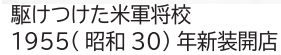
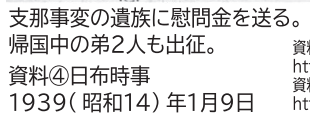
1937(昭和12)年5月、私を祖父母に預けてハワイに戻りました。翌年7月、私を心配して帰国「大学を出るまでの仕送りは絶対欠かさない。卒業したらハワイと一緒に住む」と祖父母に言い残しハワイへ。
ところで、母の弟昇・實に大変な出来事が起きました。2人共、支那事変による徴兵で、實は戦傷により帰国、入れ違いで昇が戦地に送られたのです。幸い2人共帰還することが出来ました。今に思えば38年の母の帰国は、私だけでなく弟たちのことも心配で顔を見たかったのだろーうと思います。

1941(昭和16)年12月7日、日米開戦になりましたがハワイのことをよく知る祖父母はあまり心配していませんでした。

1945(昭和20)年原爆が投下された8月6日、小学生だった私は午前8時頃から緑井の土手に自生するカラムシ(軍服の原料となる草)を友達数人で収穫していました。8時15分頃、ピカッと閃光と同時にドーンという大きい音がしてその後ちりを含んだ雨、黒い雨が降ってきました。

1957(昭和32)年3月、私が大学を卒業すると「母とハワイに」との話が本決まりになり、同年5月、渡布しました。マツキンレーハイスクールに入学して英語を勉強していたところ突然、同年7月(ベトナム戦争による)徴兵命令が来ました。幸いにも病気が理由で不合格になりましたが、それはもう驚きました。やれやれと思ったのも束の間、今度は郷里の祖母の面倒を見てくれていた叔母が「夫のいるハワイに移住する」との申し出に、ハワイでの親族会議の結果、独り身の私が帰国することになりました。母がリタイヤしたら日本へ帰るというのが”条件”でした。

1970(昭和45)年8月、母が永住帰国し、やっと親子のくらしを迎えることが出来ました。
今、母の甥、姪たち5家族はハワイと本土に根を降ろしています。
ハワイは私にとって近くにある隣の島であり、(アメリカ国籍もあり)いつでも帰ることができる身近な存在です。

[illegible]

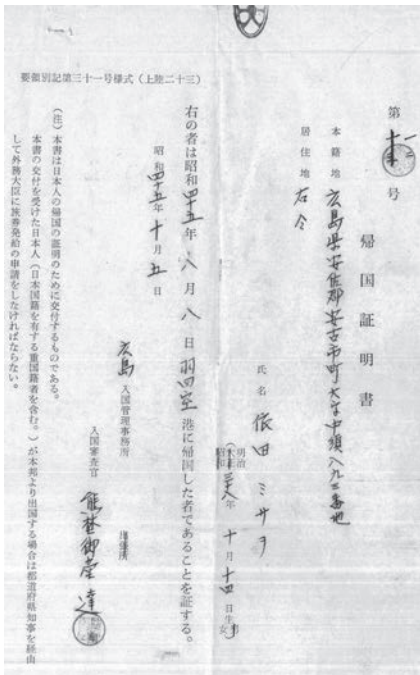
資料①日布時事 1940/8/6/
<https://hojishinbun.hoover.org/en/newspapers/tj/19400806-01.14>
 資料②日布時事 1939/8/11/
<https://hojishinbun.hoover.org/en/newspapers/tj/19390109-01.13>
 資料③日布時事 1933/2/14/
<https://hojishinbun.hoover.org/en/newspapers/tj/19330213-02.12>
 資料④日布時事 1939/1/9/
<https://hojishinbun.hoover.org/en/newspapers/tj/19390109-01.13>

小林旅館が手続きを代行



右	ウラタ・カップ	1961(昭和36)年
中	2世アマチュアコンテスト	1940(昭和15)年
左	KZOO・カップ	1965(昭和40)年

マキキ協会のサンデー・サービスで信者に配られたお知らせ。
依田ミサヲ姉帰国。
信者の消息はもれなく伝えられる。
1970（昭和45）年8月16日



日本人が再渡航の申請をする場合には、この帰国証明書を提出することによりスムーズに渡航許可が得られた。依田ミサヲはアメリカと日本の両国籍があった。

[illegible]